

## 編集委員会から

### 基礎とイノベーション

ほとんどの大学教員は、基礎的研究が最も重要であると考えており、それができる環境をつくりたいと努力しています。一方、この10年で大学に期待されていることも変化してきており、特に“イノベーション”という言葉で表現される、新規技術・プロダクトあるいはシステムに関心が注がれています。

今号の“つぶやき”では、中西一弘元会長が、「食品プロセスの解析に関する研究を行ったが、その結果をさらに展開するような研究（イノベーション）は、必要であると思いつつもできなかった。」と“つぶやかれて”います。また、「ドイツの大学ではパイロットプラントスケールの実験が普通に実施されており、現象をより忠実に再現でき、実際に役に立つデータをとることができるが、日本の大学では難しい」とも指摘されています。確かに、私も海外の大学で学生実験用のパイロットプラントスケール蒸留塔を見学したことがあります。この点については、企業会員からのコメントを待ちたいと思います。

そもそも“イノベーション”の定義も広く、検索すると“イノベーションとは”というサイトを多数見つけることができます。多くは、「経済学者ヨーゼフ・シュンペータが最初に定義し、その後、多くの学者により議論・拡張されてきたと」説明しています。また、ビジネスに関連したサイトがほとんどです。

私たちに直接関係する“イノベーション”としては政府の「科学技術・イノベーション基本法」があります。このなかでは、以下のように定義されています。

(定義)

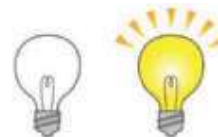
第二条 この法律において「イノベーションの創出」とは、科学的な発見又は発明、新商品又は新役務の開発その他の創造的活動を通じて新たな価値を生み出し、これを普及することにより、経済社会の大きな変化を創出することをいう。

先ごろ公表された第6期科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月26日閣議決定内閣府）では、以下のように拡張されています。

かつて、企業活動における商品開発や生産活動に直結した行為と捉えられがちだったイノベーションという概念は、今や、経済や社会の大きな変化を創出する幅広い主体による活動と捉えられ、新たな価値の創造と社会そのものの変革を見据えた「トランスフォーマティブ・イノベーション」という概念へと進化しつつある。

（トランスフォーマティブ・イノベーションとは“地球環境問題などの複雑で広範な社会的課題へ対応するため、社会の変革を志向するもの”とあり難解です。）

最初からイノベーションを目的に研究はできないでしょうから、何らかの基盤があり、思いがけない形でイノベーションにつながるのではないのでしょうか。本号で特集している代替肉（大豆タンパク質、大豆ミート）も、一例のように思います。



科学技術・イノベーション基本法 平成七年法律第三百十号

[https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=407AC1000000130\\_20210401\\_502AC0000000063](https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=407AC1000000130_20210401_502AC0000000063)

第6期科学技術・イノベーション基本計画 <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index6.html>

(山口大学 山本修一)